

シャルティアのおっばい いいおっばい

いつかこう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

珍しく二人でティータイムを楽しむシャルティアとソリュシャン。ひとしきり趣味について語り合い会話が途切れた後、ふと呟いたシャルティアの言葉に、ソリュシャンがある提案をするが……。

目次

シャルティアのおっぱい

いいおっぱい

1

シャルティアのおっぱい いいおっぱい

「ソリュシャンは良いでありんすね。」

ナザリック地下大墳墓第二階層にある死蝸玄室。

その部屋の主であるシャルティアは、ティールームの華奢な椅子に座って少し冷めた紅茶を一啜りすると、丸く小さなテーブルを挟んだ向かいに座る戦闘メイドのソリュシャンに愚痴るともなく語りかけた。

人間への嗜虐性を同じくし気が合うとはいえ、二人きりでティータイムを楽しむというのは珍しい。というか、初めての事だった。

ゲートを使った物資搬入の仕事が一段落しシャルティアが手持ち無沙汰でウロウロしていた所に、同じく仕事を終えたソリュシャンとたまたま鉢合わせし、せっかくなので空いた時間、たまには同好の士として親睦を深めようと自室に誘ったのだ。

ナザリックの絶対支配者が、NPC同士のコミュニケーションを推奨しているのも大きな動機だった。

これも仕事……と言う訳では無いが、NPCにとって至高の御方の言葉に沿った行動をする事は、自分は正しい行いをしているのだという安心感に繋がる。

そういう訳で紅茶を飲みながらひとしきりその手の話の花を咲かせ、会話が途切れた所で真祖吸血鬼はポツリとそう呟いたのだ。

「何が……でしようか？」

ソリュシャンは小首をかしげて尋ねる。シャルティアは返事をせず、ただうらやましそうな視線を彼女の胸元に送る。

「ああ……。」

それだけで、言いたい事は理解出来た。

シャルティアは両刀使いであり、胸の大きい女が好みだ。で、あるので、普段は羨ましがるより情欲に満ちた目で見てくる。シャルティアのドストライクキャラであるユリはその視線を嫌がっているが、ソリュシャンは平気だ。背の低い美少女のために、さりげなく見やすい角度にしてあげる事さえある。

という事で、欲情より嫉妬の目で見られる事は珍しい。もちろんシャルティアの公然の秘密は承知しているので、そういった目で見られるのも別に不思議では無いのだが。

「私はスライムですから……サイズは思いのままですわ。私の創造主であられるへろへろ様の設定がありますから、例えば任務で変装する際に必要ななどということでも無い限り、今のスタイルを変える気はありませんが。」

「ふう、でもスタイルの柔軟性があるというのはうらやましいであります。」

軽く嫉妬を込めてため息をつく、シャルティアはいずこにおわすとも知れない創造主に恨み言を吐く。

——うう、ペロンチーノ様、私もせめて希望が欲しかったであります。例えば1000年後にはボッキキュツボンツになる設定だったなら、夢を持つことも出来たでありますに。いえ、と言うか、私は鉄血にして熱血にして冷血の真祖吸血鬼トウルヴァンバイアでありますから、体型を自在に変えられるとかでも良かったと思うであります。エロ設定としてもそっちの方がより多くの需要に答えられたんではありませんか……？ 私の体型がとてもまにあつくな需要がある、つというのとは分かりませんが、あまりにご無体な設定ではありませんでしょうか……？ ——至高の御方の設定に対して不満を言う、というのはおかしな事に思えるかもしれないが、もちろんそれ自体がペロンチーノの設定の一つだ。

そもそも自分の体型に不満が無ければ、必死に胸に詰め物をする事も無い。

胸に強いコンプレックスを持つ美少女吸血鬼が、涙ぐましい努力をしながら創造主自分に恨み言を言うのもゾクゾクする。

ペロンチーノの業は、どこまでも深い。リアル姉の存在のため、そっち方向だけはポツカリと空白であるが。

そんなしよんぼりとした階層守護者の様子を観察したソリュシャンは、ふとある事を思いついた。

こんな事を言つて大丈夫だろうか、つとやや危惧する心も持ちなが

らも、シャルティアに語りかける。

「シャルティア様、その……差し出がましいのですが。」

「ん？ なに、ソリュシャン？」

「その……お気を悪くなされたらと思うので、ご提案し辛いのですが。」

「随分と奥歯に物が挟まったような言い方でありんすね。心配しないで良いでありんす。ソリュシャンの性格は知ってるでありんすから、アルベドやアウラと違って悪意で私を傷つける真似なんかしないと分かっているでありんす。それに私達は趣味を共にするもの。遠慮無く言っただけでありんす。私のためなんでありなんしょ？ さあ、なに？」

思いのほか良い食いつきに、ソリュシャンは困ったようにわずかに眉を顰めて微笑む。

自分に悪意が無い、というのも妙に信頼されたものである。長女に言わせれば、ルプスレギナと双璧のサディストなのだが。

でもまあ、その嗜虐性が至高の御方に創造されたナザリックの仲間達に向けられる事は無いのは確かだ。

少し迷うが、意を決してテーブルの上に身を乗り出し顔をシャルティアに近づける。

「はい、それでは……。ちよつとお耳を。」

シャルティアも応じて少し身体を前に傾け左耳をソリュシャンに預ける。

「くふふ、ちよつとくすぐりたいでありんす。ああん、離さなくていいでありんすよ。もつと唇を近づけて……。くふっ♪」

ソリュシャンの官能的な唇が、息がかかるほどすぐ側まで近づくのは悪くない。実に悪くない。

両刀使いは、いつそのまま唇を奪ってやろうか、つと考えるが、彼女の提案にも興味があつたのでそこは思いとどまる。

周りには誰もいない——いや、正確には吸血鬼の花嫁達が部屋の隅に控えているのだが、召喚モンスターである彼女達の存在は数に入らない——が、ソリュシャンはまるで不可知の監視者を警戒するかよう

に、真祖吸血鬼の耳元で小声で何事か囁く。

フンフンとそれに耳を傾けるシャルティアの顔は、話が進むに連れ、興味、驚き、困惑、悩み、喜び、迷い、期待……つと様々な感情を素直に表す百面相を繰り返した。

「——いかがでしょう？」

多分怒りはしないだろう……とは思いつつ、デリケートな話題だけにやはり反応が少し怖い。

シャルティアはしばし沈黙した。ソリュシャンは、提案したのは失敗だったか……つとやや後悔する。

「申し訳ありません、シャルティア様。やはり出過ぎた提案でした。お許しくだ……。」

「待つて。待つてありませんソリュシャン。別に怒つてなどいないであります。もうちよつと待つて……で、ありません。」

片手を上げてそう押しとどめると、目を瞑って再び沈思黙考する。結構な時間が過ぎていく。

心配げなソリュシャンがためらいつつ、また声を掛けようか……と口を開けた丁度そのタイミングで、シャルティアは目を開けた。

その眼差しには、強い決意と期待が籠っている。

「その案、乗らせてもらおうであります。」



「あれ？ 誰が来たのかと思つたら。」

誰かが転移門ゲートを通つて第六階層に來た事を察知したアウラが様子を見に來ると、そこには喧嘩友達シャルティアがいた。

「どうしたのさ、連絡も無しに急に來るなんて。なんか用事でもあるの？」

アウラは少し訝しげに尋ねる。どうもシャルティアの様子がおかしい。

なんというか、変に自信ありげというか、言いたくて仕方のない事

があつてウズウズしているというか……。

「せっかく顔が見たくて会いに来たのに、そうそっけなくするもんでもないでありんす、アウラ。私達はペロロンチーノ様とぶくぶく茶釜様、至高のご姉弟から創造された、言わば姉妹。姉が妹を訪ねるのに理由なんかいらなないでありんしよ?」

「うっわ、なによ急に、気色悪い! だいたい姉妹っていうんなら、姉のぶくぶく茶釜様に創造された私の方が姉でしょ!」

「ん? お姉ちゃんぶりたいんでありんすか? しょうがないでありんすねえ。ならこう呼んで差し上げんしよるか……アウラお姉ちゃん♪」

「うわっうわっうわわわわっ! 気持ち悪い! 気持ち悪い! 気持ち悪い! な、なんなのよシャルティア! 悪い血でも吸つたの!?!」

「ふう、酷い言い草でありんすねえ。そちらの望み通りにしただけでありんすのに……。」

シャルティアは妙に余裕しやくしやくだ。普段ならもつとムキになりそうなもののに、アウラの言葉を軽く受け流している。

「……ねえちよつと、ほんとどうしたのさ。シャルティア、ちよつとおかしいよ。……ん?」

ふとアウラは、シャルティアが不自然に反り返っているのに気づく。見ろ、ここを見ろ、つと言ってるように見える。

「……偽乳アピールして何がしたいのさ?」

しかし普段ならその呼ばれ方をすれば怒り狂うはずの男胸は、一向に気にせず一層胸を強調する。

「……ねえシャルティアってば。シャルティア。……しやーるーていーあー!」

「ん? なんでありんすか?」

「ありんすか? じゃないよ。だーかーらー! 偽乳強調して何したいのさって聞いているの!」

「はて……にせちちとは一体なんのことでありんしよるか?」

「あーもう! それだよそれ! その不自然に出っ張ってるその事

！」

「ふふ、恥ずかしいでありますねえアウラ。いくら女同士でも他人の胸を指差すなんて、はしたないでありますよ?」

「……姉妹じゃ無かったの?」

「コホン、まあそれはともかく……そんなに気になるなら、触ってみるでありますか?」

「はあ?」

「触ってみるでありますか? と、言ったんでありますえ。ほれほれ♪ 遠慮せずとも良いでありますよ?」

「……あたし、あんたと違ってそんな趣味ないんだけど? 大体、詰め物触ったらなんだっての?」

しかしシャルティアは答えず、ただニヤニヤとアウラを見つめているだけだ。

どこか優越感に満ちたその顔にちよつとムツとしながら、アウラは無造作にシャルティアの胸に両手を当ててみる。

ふによん

「あんっ♪」

「……え!?!」

触った途端シャルティアがビクツと反応し、アウラは思わずウワツとなつて手を離れた。

手の平に妙な感触があつた。シャルティアはほんのりと顔を赤らめ、アウラを見る。

「え? え? え?」——何、今の……?——

「どうしたんであります、アウラ。もう良いんでありますか?」

シャルティアは意味深な表情でアウラに問いかける。

「……………」

ダークエルフ
闇妖精の少女は、今度は用心深く……恐る恐る、もう一度手を伸ばし触ってみる。

むによによん むによによん

「あふん♪ んふっ。ちよつと激しいでありますえ。うふふ。」

『え? え? ええ〜!』

アウラは胸を掴んだまま驚愕する。そこには確かに柔らかい感触がある。単なる詰め物ではない、生の^{なま}感触が……。

むにゆにゆん むにゆにゆん むにゆにゆん

「はうっ。ううん。くふっ……。」

「な、何よこれ!」

「んふふ、アウラ、そろそろ離してくれなんし。それとも、おんしもやっぱりそつちのケがあるんでありんしょうか?」

「え? あっ、ああっ、ゴメン……!」

アウラはハツとして慌てて手を離し、そしてちよつと自分にムツとする。思わずシャルティアに謝ってしまったのが屈辱だ。

そんな動揺しているアウラに、得意げな目線を送るシャルティア。

「ちよつと……。一体何したのよあんた? どうしたら、その、こんな……。」

シャルティアはニヤニヤと笑いながら沈黙する。普段なら、このまま焦らすだけ焦らして教えなかったかもしれない。

しかし今は酷く大らかに、寛大な気分になっていた。胸の大きさは心の大きさなのだろうか。

この幸せを、アウラに分けてあげても良い心境になっていた。

「そうでありんすねえ………姉妹の^{よしみ}誼で教えて差しあげんしょうか。知りたかったら、ソリュシヤンに聞くと良いであります。」



「んふふ」

キョトンしたままのアウラを放って自身の階層に戻ったシャル

ティアは、自室の姿見で全裸の自分を眺め、悦に入っていた。

14歳相当の体型にしては充分過ぎる……いや、巨乳と言っても良い見事なバスト。むしろ大きすぎてアンバランスになるギリギリのラインだ。

その素晴らしい曲線に沿って、指先で軽くツーツと撫でてみる。「んっ……。」

背中にザワツと来るような快感がある。本当に自分のものであるかのような感覚。凄い。これは凄い。感動的ですからある。

「まさかこんな素晴らしいスライムがいたなんて……。もう、ソリュシャンってば、もっと早く教えて欲しかったでありんす。」

軽く唇を尖らせ文句を言うが、その響きには深い満足感が込められている。口角が上がるのを止められない。

まさに夢に見たような見事なバスト。角度を変えたりポーズを取ったりと、男胸改め巨乳少女はすっかりご満悦だ。

そう、その正体はソリュシャンの眷属、《豊満な娘の乳房》という……実にまんま名前がついた、プチスライム亜種である。

スライムなので形は自在に変える事が出来るが、そのデフォルトの形は『おっぱい』だ。丸いお餅の上に小さな突起がついているその形は、まさしくそうとしか呼べないものだった。

そして彼女(?)達は、二匹が並んで人型生物の胸に張り付くという習性がある。

張り付いた後は緩やかに魔法的な神経接続をし、母体となった者にとっては自身の胸そのもののような感覚が生まれる。LV1キャラにも全く無害であり、習性が攻撃とみなされないためLV100キャラにも問題なく効果がある。そしてシャルティアのように、皮膚感覚を持っているアンデッドにも。

ちなみに色は張り付いた生物に合わせて変化し、突起だけ別な色に変わる。例えば、ピンクに。安心安全かつ完璧な、生きるパッドそのものだ。

それは『スライムだから問題ないもん!』つという、ユグドラシルの禁止事項ギリギリをついたモンスターである。現実の生き物に例

えるなら《ユムシ》みたいなものだ。とはいえやはりアレなので、LV1固定の弱小でありながらも伝説レベルの超々レアモンスターだ。開発者の一人が、首をかけて密かにデータにすべりこましたという逸話があるとか無いとか。いつの時代にも、名も知れない命を惜しまぬ勇者はいるのだ。

——まあプレイヤーの外装に《ヌラヌラ光るピンクの肉棒》があるぐらいなのだから、キチンと合法的に問題なく、チェックを通ったのかもしれないが。

「ふふっ、どう？ お前達。」

「見事なお姿です。さすがシャルティア様、思わず見惚れてしまいました。」

「まさに天上の美。これほど完璧なプロポーションは全ナザリック、いえ全世界を見渡しても決して他に見つからぬかと。」

「ああ、これほどお美しい主^{あるじ}にお仕え出来る私達はなんとという果報者なのでしょう。」

グラビアアイドルのようなポーズを取り得意満面の主^{あるじ}の問いかけに、吸血鬼の花嫁達は口々に褒め称える……が、次の瞬間彼女達はハッと青ざめる。

この賛辞は正しかったのか。いかに本物そっくりであれ、結局は張り付いたスライム……生きるパッドなのだ。それを至上の美のように称えるという事は、素のシャルティアを貶める事にならないか。自分達にそういう気が無いとしても、主^{あるじ}が咎^{とが}め立てするのではないか。もしそう取られたなら、どんな陰惨な罰が我が身に降りかかるか。

「そう？ ありがと。おんし達も私の眷属だけあってなかなか美しいでありますよ。」

「……!? な、なんともつたいなきお言葉……。」

「いいのいいの。まあそもそも美しくない眷属を、私が側に侍^{はべ}らすはずは無いですよ。」

その言葉に吸血鬼の花嫁達は驚き、動揺する。冷酷無慈悲な主人が自分達に御礼の言葉を述べ、なおかつお世辞を言うなど、かえって不気味である。内心はやはり怒っており、この後それに倍する罰が待ち

構えているのでは無いか……つと身を震わせる。

しかし今のシャルティアに他意は無い。単に至極機嫌が良いだけだ。普段なら吸血鬼の花嫁達の言葉尻を捕らえてネチネチと虐める事もある……つというかそれが通常だが、今夜はありえないほど寛大な気分になつて居るのだ。

その上機嫌そのものの主の気が変わりませんようにと、腫れ物に触るように接する彼ヴァンパイア・ブライド女達——そう振る舞うのはいつもの事であるが——の気持ちなど一顧だにせず、シャルティアは湯浴みをしながら、もはや元からそうであったとしか思えないその巨乳を弄り楽しむ。もしや水を吸って風船のように膨らんでしまうというオチ……にはならないとあらかじめソリュシャンに確認してあるので、たつぷりと時間を掛け、眷属ヴァンパイア・ブライド任せにせず自分で優しく洗ってやる。シャルティアが、NPCで無いシモベに対しこれほど愛情を込めるなどあり得ない現象だ。だが吸血鬼の花嫁達はプチスライムに嫉妬などしない。ただただ、この穏やかな時間が続いてくれますようにとだけ願う。

湯浴みをすませ吸血鬼の花嫁達に身体を拭かせるシャルティアは、彼女達が手にするタオルが胸の上を通り過ぎる度に感じるこそばゆさにまた満足の気持ちで新たに、浮き立った様子を隠しもしない。館中の眷属達……知性の無い存在ですらが彼女の機嫌を感じ取り、どうかこの幸せが長引きますようにと至高ペロロンチーノの御方に祈る。

身体を拭き終えたシャルティアは再び全裸で姿見の前に立った。そして軽くトントンとジャンプする。

ぷるるん　ぷるるん

「んふん」

ぷるるん　ぷるるん　ぷるるん

「んふん　んふん」

ぷるるん　ぷるるん　ぷるるん　ぷるるん……

「んふん　んふん　んふん」

どんなに揺らしても、ずれる事が無いし形も変わらない。ソリュシャンが言った通りだ。

これを見て、偽乳だと看破出来る者はいないだろう。完璧だ。あの守護者統括にだって対抗出来る。

ならば、トウの立ったおばさんより外見年齢が若い自分の方が圧倒的に有利！

シャルティアは両胸を鷲掴むと、この上なく邪悪で淫靡な笑みを浮かべた。

「さ、お前達、今宵は寝かさないでありんすえ。」

完璧なバストによりさらに女王然とした威厳を増した真祖吸血鬼は欲情に濡れそぼった目で、かきずく吸血鬼の花嫁達を睨めつけ、そう高らかに宣言した。



寝かさない……つとは言ったものの、普段よりずっと激しい行為をした後は、満ち足りていつもよりよほど早く寝付いたシャルティア。アンデッドであるシャルティアはもちろんその気になれば不眠不休で平気だが、普段は設定された生活スタイルとして睡眠をとる。

古色蒼然たる棺桶ではなく、真紅を基調に飾られた天蓋付きのベッドに吸血鬼の花嫁達を侍らせながらだが。

しばらく惰眠を貪った後、シャルティアは夢うつつのまま再び自分の胸をまさぐり、満足感を再確認しようとした。

スカッ

「……………ん？」

スカッ スカッ

「ん？ ん？ ん？ ん？」

手応えが無い。

スカッ スカッ ……ペタン

「……………!?!」

シャルティアはガバツと飛び起きた。そして自分の胸を凝視する。そこには……

——無い！ 無い！ どこに、どこにいった!?! 私の胸！ 胸！

すっぴりとシーツを被って眼がどんよりと曇ったシャルティアだった。まるで死人のような……アンデッド死人だが……雰囲気だ。上目遣いにソリュシヤンを見る赤い瞳が、継るような光を放っている。

そして震える声で、ポツリポツリと語り出す。

「ど、どうして良いのか分からないのでありんす。昨夜までは確かに……で、でも起きてみたら……じ、自分で勝手に外していいのか……で、でもそれで余計に酷い事になったらと思うと……だ、だからソリュシヤンに相談してからと……。」

シャルティアの様子に、ソリュシヤンも顔が曇る。何の事でしょうか、とは聞かない。当然あれの事だ。

自分が勧めた事によって、NPCの中でも気が合うシャルティアが混乱している。責任感の強い彼女にとつても辛い事だ。

怯えきつた吸血鬼の花嫁達——ヴァンパイア・ブライド勇敢なる彼女も殺されなかつたようだ——を人払いし、しばらく躊躇った後、シーツを取る。

「……!?!」

ソリュシヤンは絶句する。

最初は、単にプチスライム達が取れているだけなのかと思った。——だが……。

恐る恐る、ゆっくりとソリュシヤンに背中を見せるシャルティア。

プチスライム達は、背中に張り付いていた。

「こ、これは一体……?」

「グスン。私が聞きたいでありんす、ソリュシヤン。これはどういう事でありんすか……? グスッ。」

シャルティアの口調は、ソリュシヤンを責め立てるようなものではなかつた。ただただ、助けて欲しいという戸惑いと怯えに満ちた泣き声だ。

「これはまさか……。ハッ?! そういう事……なの? で、でも……ありえるのかしら……?」

「げ、原因が分かるんでありんすか? な、なら教えてほしいでありんす! な、なんでプチスライム達は背中に移動したのでありんすか!?!」

聞きたくない。聞きたくはないが、聞かなければならない。

ソリュシャンは言い淀んだ。憶測はつく。恐らく当たっているだろうが、それは……。

「どんな理由でも、ソリュシャンを怒ったりはしないであります。ペロンチーノ様に誓うであります！」

「シャルティア様……。」

NPCにとつてもっとも大切な誓いである自身の創造主を持ちだされては、それがどんな残酷な宣告であったとしても答えなければいけない。

ソリュシャンは覚悟を決め、出来るだけ淡々と、事実のみを述べる。

「……プチスライム達は、体の凹凸で前と後ろを判断します。意志はないので完全に本能なのですが。最初に取り付けた場所が胸と判断されれば、当然そのまま動きません。」

「ヒツ……!?!」

「つ、つまり、その……。シャルティア様の背中が……。前よりも、その、肩甲骨のでっぱりの方が胸と判断されて……。その……。」

そう、胸があまりにもまっ平らだったため母^{シャルティア}体が寝付いて静かになった後プチスライム達は落ち着かなくなり、本能的に出っ張りを求めて背中に回ったのだ。

シャルティアは……。吸血鬼なのに、血の巡りは関係無いのに、クラッと目眩がして、眼の前が真っ暗になった。

「い、いえ、でも！ プチスライム達もずっと背中にくっついていてとは思われません！ やはり胸と背中では感覚が全く違いますから！」

いくらシャルティア様のお胸がペタン……。いえ、柔らかさ……。あの、いくらなんでも……。いえ、ですから……。最終的にはやはり前に戻るか……。！」

気休めではなく、ソリュシャンの予測としてはこの後はまず間違はなくまた前に戻ってくるはずだ。一旦確認すれば、プチスライム達もさすがに移動したのは誤りだったと判断するはずだ。もう丸一日も経てば再び身体を半周するだろう。

だがどう取り繕うと、一度体の前後を間違われたのは事実だ。ソ

リユシヤンとしてもさすがにそれは予測のつかない、あり得ない事態だった。

しかもシャルティアには黙っていたが、プチスライム達の判断の一つには乳首の存在もある。いくらまっ平らであれ、やはりこの移動は考えられない確率で起きた事だ。

ひとつ慰み……つと言えるかだが……シャルティアがアンデッドであつた事も災いした。心臓が動いていれば、さすがに位置関係は過たない。本来は、そういう願望がある男にでも取り付ける事が出来るのだから。知能が無いとはいえプチスライム達も相当混乱した上での、とりあえず移動してみるか、つという判断だったのだろう。

だがその気まぐれは、文字通りシャルティアの胸を深くえぐった。元からえぐれてるのに。

シャルティアはヨヨヨとへたりこんだ。

「これは……罰でありんしょうか。ペロロンチーノ様の……創造主たる至高の御方が設定した姿をNPCたる私が勝手に変えてしまったがゆえの、罪人の姿つみびとなのでありんしょうか……。」

「……！ 申し訳ありません、シャルティア様。私が余計な提案などしてしまったために……。」

創造主に対する罪と罰、つと言う思いはさすがにキツイ。深々と頭を下げて謝るソリュシヤン。しかしシャルティアは寂しげな顔で微笑み、静かに首を横に振った。

「ソリュシヤンのせいでは無いでありんす。すべては私の浅はかな欲が招いた結果。お許し下さいペロロンチーノ様。私が愚かでありんした……。私の胸は、ぱつどで誤魔化してこそペロロンチーノ様のご意向に沿うのでありんすね……。きつとプチスライム達を通して私にそう伝えたかったのでありんしょう……。」

——もしペロロンチーノが聞いたなら、『あ、いや、うん、なんかゴメン。』つと手を合わせて謝りそうな、被創造者の悔恨。

『まだアインズ様やアルベドに見せていなかったのが、せめてもの救いでありんしょうか……。』

傷心の美少女吸血鬼は、わずかながらの幸運に慰みを求める。

ほぼ姉妹であり、今のところ同じぺたん胸仲間でもあるアウラにはつい速攻で自慢してしまっただが、念のため一日充分身体に馴染ませて……そしてちよつと一晩楽しんでから披露しよう、つと思つたのが幸いだった。

——良かった—— そう、自分に言い聞かせる。

そして己が運命を受け入れた薄胸シャルティアの美少女は目をそつと閉じ、俯いたまま囁くように懇願する。

「外して……おくんまし。」

ソリュシャンは、ただ黙つて頷いた……。



『ふう……まさかこんな結果になるなんて。シャルティア様には申し訳ない事をしたわね……。』

ナザリック地下第九階層、スパリゾートナザリック。

ソリュシャンは9種17浴槽ある内の一つ、炭酸風呂に入り、肌にピリピリとした刺激を感じながら独りごちる。

プレアデス達は……いや、NPC達は娯楽施設をほぼ使用しない。比較的頻繁に使用されるのは、エクレア他数人の常連がいる茸人間マイコンドの副料理長、ピツキーがマスターを務めるバーぐらいなものだろう。NPC達にとっての最大の娯楽……と言って差し支えあるならば生きがいであり喜び……は、至高の御方のために働く事である。ソリュシャンにとつてもそれに近い喜びは、知的生物を自身の体内でジックリ溶かしながら、その藻掻き苦しむ様を味わう事ぐらいである。

であるので、そもそも娯楽にあまり興味が無いのだ。一般メイドのインクリメントの読書のように、至高の御方に設定されている事ならば別であるが。

ひよつとしたらその設定に従い大いに娯楽を楽しんでいるNPCもいるのかもしれないが、ソリュシャンは知らない。

けれど、ナザリックナザリックの支配者マスターはNPC達がそういった設定によらない、自由な振る舞いをする事を推奨している向きがある。

比較的思考に柔軟性を持つ（それがスライムの身体性とリンクしているのかは不明だが）ソリュシャンは、その主の意向を汲んでたまにスパを利用して入っている。入ってしまったら、やはり気持ちも良い。時には人型を溶いて不定形なままお湯に揺蕩う事もある。

——今は完璧なプロポーシヨンの豊かなバストを。プカプカとお湯に浮かばせているが。

そして天井を仰ぎながらぼんやりと今回の件に思いを馳せる。

プチスライム達は、今ソリュシャンの体内にいる。本能だけのモンスターだが、それでも直接の主であるソリュシャンの気分が伝わったのだろうか、なんとなく居心地悪そうにモゾモゾと動く。

「あなた達のせいでは無いわ。」

少し微笑んで、お腹……人で言う子宮あたりを、優しく撫でる。サティストの名に恥じない性格のソリュシャンだが、従属するモンスターに対する態度はシャルティアよりもアウラに近い。これは単に運が、あるいは巡り合わせが悪かっただけだ。そう割り切ろう。それに……。

「あら？」

ソリュシャンはふと気配を感じ振り向いた。そこには、体の前面を手ぬぐいで隠した階層守護者が立っていた。

「アウラ様……。」

「や、やあソリュシャン、ご一緒してもいいかな？」

「ええ、もちろん。光栄ですわ。」

アウラは軽く体を洗い手ぬぐいを頭に乗せると、ソリュシャンの横に浸かった。

「ふー気持ちいいね。炭酸風呂って初めてだけど、肌がシャワシャワしてちよつとくすぐったいけど、良い感触。」

「ええ。」

「意外だったんだけど、ソリュシャンって結構ここに来るの？」

「ええ、時々ですが。」

「……………」

「……………」

少し沈黙が流れる。雰囲気からして、どうやらソリュシヤンがここにいる事をプレアデスの誰かに聞いて、二人きりで話すには丁度良いと思い、わざわざ入りに来たのだろう。何か言いたげなのは分かるが、ソリュシヤンは促さず少し待つ。

アウラは上を向いてもう一度フーつと息を吐くと、さり気なさを装って話しかけてきた。

「ね、ねえソリュシヤン?」

「なんでしよう、アウラ様?」

「あ、あのさあ……えつと……い、いや、あたしはさあ、未来が……あの。まだ76歳だし。」

「ええ……もちろん。」

確かに闇妖精ダークエルフの長い寿命からすると、アウラは肉体的にも精神的にも、まだ幼い少女だ。

それはわざわざ説明されるまでもない。当然、話題の前ぶりだろう。

「だからさ、別にその……焦んなくってもいいんだ。」

「はい……?」

「うん、だけどさ、えつと……。いや、大人になるのは随分先だなあと思ってさ。結構……待つよなあ。」

「……ああ。」

そういう事か。

勘の鋭いソリュシヤンはそれだけで察しがついた。恐らくシャルティアが自慢しに来たのだろう。

そしてアウラも、それに対抗しなくなったのだ。あんな事態になる前の真祖吸血鬼トウルヴァンパイアがどれほど得意げだったか、目に浮かぶようだ。ソリュシヤン
自分の事も教えるなんて。

そしてシャルティアの失敗を思い軽く逡巡するも、歪んだ性癖を持つ美しい不定形の粘液シヨゴスは、悪魔の囁き……囁かれるのであり、囁くこと……を、止める事が出来なかった。

「アウラ様。」

「ん? ん? な、なに?」

「アインズ様は常に先を予測して行動せよと仰られています。ですから遠い未来に向けて研鑽を積むというのは、きつと良い事だと思おうんです。」

「う、うん、そうだね。さすがはアインズ様だよね！ 私達シモベは、そのお言葉に従うべきだよね！」

「ええ。アウラ様は将来、周囲の羨望を一心に集める見目麗しい淑女になられると思います。ですから、今からその姿をイメージして立ち居振る舞いを練習しておく事は決して無駄にはならないと思います。そして……学びとはまず形から入るのが良いと聞き及んでいます。これもアインズ様の受け売りですが。」

「うん、うん！ アインズ様の言うことなら間違いないよね！ 絶対だよね！」

「はい、もちろんですとも。」

敬愛する主のお墨付きとあれば、シモベ達にとってそれ以上の保証などありえない。すべての黒は、白になるのだ。

「……大きくしてみますか？」

「えっ、えっ！?! な、何をかな〜？」

わざとらしく聞き返すアウラに優しく微笑みながら、ソリュシヤンは思う。

シャルティア様の事は残念だった。けれども、あんな事はさすがに二度と起きまい。闇妖精の心臓は動いているのだし。

けれど……また他の何かが起きそうな気もする。予測不能な事態が。あの方を気の毒に思ったのは嘘偽りの無い感情だけれども、同時にあの麗しい真祖吸血鬼にして最強の階層守護者が、身も世もなくしよんぼりと嘆く姿に、全く興奮しなかったと言えば嘘になる。愛おしいからこそ、その切ない姿もいじらしい。

そして今日の前にいる、強く気高く明るい、まだ性に無知なる幼い少女。

あれをつける事で、その心境にどのような変化が起きるのだろうか。それが、ただ単に大人になれたという純真無垢な喜びだけと思えないのだ。

例え予感通りの何事かが起きなくとも、自分が手助けした行為によつて引き起こされる感覚への戸惑い、ためらい、なんらかの喪失感、変化……。

そしてその時に見せるであろう、様々な感情が入り混じった微妙な表情……。さぞゾクゾクとさせてくれる事だろう。

それは、自然に開かれるまで決して誰も覗いてはならない、ゆつくりと大切に育まれるべき秘めた蕾を、一度無理やり開花させるような背徳感。

純粹なるものに刻まれる、二度と元に戻せぬ穢れ。

ソリュシヤンの体内で何かが疼く。主の意を察した、プチスライム達の蠢きなのか、それとも自身の……。

これも一種の倒錯的なサディズムだろうか。いや、ナザリツクの仲間^{NPC}に対して自分が嗜虐性を発揮する事は無い。

しかしあちらが望んでいるなら、それによつて引き起こされる現象で、自分の趣味を満足させるのもやぶさかではない。

これも、アインズ様がそういう関係を何とかと仰っていた。

『えつと……ういんういん？ だったかしら。』

なぜ擬音がそういう意味になるのかは分からないけれど、至高の御方のお言葉ならばそれが絶対。

シャルティア様が見たらどういふ感情を引き起こすのだろう。アウラ様に対しても、そして自分に対しても。

——だが、ソリュシヤンはこの先を見てみたいという欲望を抑えきれなかった。

仕方がない、きつとこれが自分の、へ口へ口様に設定された性格^業なのだから。

「普段の男装ももちろん素敵ですが……胸の空いたドレスを着こなすアウラ様は、さぞお美しい事でしょう。」

「えっ？ や、やだなあ、何言ってるのさソリュシヤン、て、照れるなあ。あ、あたしなんか……。」

「いいえアウラ様、貴方様はいずれ大輪の花を咲かせる、輝く蕾……。今でもその零れる煌めきは、誰の目にも眩しいですわ。ご自身がまだ

自覚なさっていないだけです。」

「……ア、アインズ様……も？　アインズ様も、そういう目で見てくださってるのかな？」

「ええ、もちろん。」

恥ずかしがりつつもキラキラと目を輝かせる闇妖精ダークエルフの少女を前に、ソリュシヤンは顔が変形するほど笑みが大きくなり過ぎないように、手で口元を抑えて気をつける。

そして、どうせならもつと楽しみたい、つとも思う。

『提案してみようかしら。アウラ様は嫌がるだろうけれど、言いくるめ……コホン、納得させるのはきつと簡単ね。』

あの方かたの方は問題ない。口で何と言っても、本心では試したがるに決まっている。

ソリュシヤンは、すでに胸の大きくなった自分を想像しデレデレと幸せそうな百面相を繰り返すアウラに、さりげなく尋ねる。

「そうそう、アウラ様、マーレ様も……ご興味がおありなのでは？」

ソリュシヤンの笑みは抑えた手からこぼれ落ち、顎の先が水面に当たってポチャリと音を立てた。

END